

# 特別企画 インタビュー ロシア語研究室を訪ねて

## 語学 浦・峰岸研究室

今回は、ロシア語研究室の浦・峰岸の両先生に、留学や東工大の事を伺いました。ロシア語研究室は西3号館10階の、学生のほとんどないひっそりしたところにあるため目立ちませんが、晴れた日には研究室から関東平野一円を眺める事が出来ます。その部屋で貴重な時間をいただき、お話を伺いました。(以下、敬称略)

——それではまず、語学をはじめるきっかけからお願ひします。

峰岸：気がついたらこうなっていました(笑)。はじめは語学関係の授業は嫌いで、どちらかというと、社会科学・歴史などの方が好きでした。高校生の頃、プラハ事件(ソ連がチェコに侵入/1968年)が起こりその印象が鮮明だったので、東欧に関心が向いていたんです。それに60年代中頃から、東欧文学が日本に紹介されるようになり、刺激されたんです。私は青森県で生まれたので、ソ連には親近感もあったように思います(笑)。その当時、ソ連は神秘的で面白そうでしたし、東欧を知るにはロシア語を勉強する必要があると思ってロシア語を選びました。

浦：僕がロシア語を始めたのは全くの偶然からなんです。はじめは仏文に進みたかったのですが、試験に落ちてしまい、仕方なくロシア語を始めたんです。だから大学では真

面目な学生ではありませんでした。不謹慎な話ですが、大学4年間を漫然と過ごし卒業してしまいました。一度は就職してサラリーマンのように勤めたこともあるのですが、なにか張り合いがなく、こんなことをしていくいいのだろうか、これが一生自分の仕事になるのだろうかという思いが消えませんでした。そんな焦りにも似た気持ちの時に、チェーホフを原文で読み始めたのです。本当にロシア語に出会ったのはこの時だと思います。するとチェーホフの中に「労働には詩がなければ」という一節があったのです。「三人姉妹」のイリーナの台詞です。まったくそうだと思いました。我々がやっている労働には詩がない、僕が漫然と抱いていた不満はこれなんだ、と。それでチェーホフを勉強しようと思って、翌年大学院に進んだんです。ところが入ってみると勉強も嫌いでした(笑)。チェーホフを読んでいるうちは楽しいのですが、これを論文にするというのは楽しいことではなく、苦行でした。おかげで修士過程には目いっぱいいました。そのため博士過程に進んでからはチェーホフから逃れたい一心で、現代のソビエト文学を読んだり、マイエルホリドという今世紀初頭の伝説的な演出家のことを調べたりしていました。またそろそろチェーホフのことをやってみたいなど、最近思い始めています。

### 注：

「チェーホフ」 19世紀末にソ連で活躍した作家。19世紀のロシア小説というよりは、20世紀につながる作品を書いた。代表作は「かもめ」「三人姉妹」「桜の園」など。

「メイエルホリド」 ソ連の演出家。「演者」と「観客」といった固定した演劇の枠を取り払い、20世紀の演劇界に新しいパラダイムを切り開いた、アバンギャルド運動家の人。



浦助教授

——外国語に携わるという仕事柄、留学された事はありますか。

峰岸：私はユーゴスラビアに2年程行ったのが初めての留学でした。そこで主に、スラブ語のひとつであるセルビア・クロアチア語（ユーゴスラビアの母国語）について勉強しました。ロシア語もスラブ語のひとつです。次に行ったのはモスクワで10ヶ月滞在しました。数年前に、またユーゴスラビアに10ヶ月留学しました。長期間滞在したのはこの3つです。旅行では西ヨーロッパの方にも行ったりしました。

浦：残念ながら僕には留学の経験はありません。日ソの関係は文化的にたいへん遅れていて、学生の身分ではおいそれと留学できませんでした。日ソ協会や交流協会、政党が運営するパイプがあるだけで、開かれた留学制度はなかったんです。今年になってようやくソ連も日本の学生に門戸を開き、アメリカに行くのと同じように留学できるようになります。

——留学についてどのような考え方をお持ちですか。

峰岸：東工大の学生に限らず、外国に行ってみることを勧めます。日本は特殊な環境ということを自覚してほしいと思います。例えばユーゴスラビアに行くと、まわりにいろんな言葉を話す人がいて考え方や生活習慣も皆それぞれバラバラだとか。日本では当たり前だと思っていることがそうでないとか、そういった事はどこの国へ行っても感じられると思います。若いうちにいろんな事を見てほしいと思います。

浦：僕も留学に賛成です。特にこの学生はせっかく大学に入ってきたのに、高校生活の延長みたいな人が多いように思います。だから少し道をはずれてみるのも楽しいのではないかと考えています。

——普段は何を研究されておられますか。

峰岸：今している仕事は、個人的にはユーゴスラビアの言語や文化の紹介が中心です。日本にいろんな本を紹介したいんです。ソ連の本はかなり紹介されていますが、ユーゴスラビアはまだまだ知られていませんから。

浦：仕事で言えば、翻訳や原稿を書くというのが中心になります。原稿を書くといっても、ソ連の演劇状況がどうだとか、いまロシア文学はどうなっているのかだとか、そういう紹介が専らなんですが、これがここにきてかなり難しくなってきました。ご存じのように、今ソ連はペレストロイカの真っ最中で、政治や経済はもちろん、文学や演劇についても今までの尺度では到底推し量ることが出来ません。西側の我々研究者が設定したハードルをいとも簡単に飛び越えて、現在ソ連社会は進みつつあります。だから今ソ連について何かを言うことはとても難しいんです。一方で我が国を見ると、そんなソ連のことなんか知ったことかという風潮がなくもありません。特に若い人は、日本がベストだと思っていて、外の事にあまり関心がないように思います。本当はソ連の動きも、東欧の動きも決して我々にとって無



縁ではないのだけれど、対岸の火事みたいに、ああやっているなぐらいでしかないんです。いや、そうじやないんだ、これは我々にとっても大きな問題なんだ、我々がこれからどんな社会を目指すのか、ソ連や東欧の動きはその問題をも突きつけているのだということを知ってもらいたいです。そういう風に原稿が書ければいいのですが、なかなか難しいんです。翻訳の面でもそうです。ロシア文学はクライ、ダサイ、オモシロクナイと思われがちだけれど、今はほしいぶん多様になってきています。僕の仕事はその多様性を紹介することなんですが、堅苦しいイメージが一般的だけに、いきおい僕が紹介するのは「軽い」「ふざけた」ものに傾きがちです。

——ところで東工大的学生をどのように見ておられますか。

峰岸：1年のときにもっとゆったりできるといいと思います。専門をやるのは当たり前なのだから、他の事をやる余裕があってもいいのになと思います。1年からきりきりしてかわいそうだと思いません。語学に力を入れられれば生の情報を手に入れることだってできるし。先は長いんだから、限られた世界にしかいられないのでは残念です。でも人間的には皆さん誠実だと思います。

浦：真面目ですね、見た目には。確かに1年の時は真面目です。出席もいい。ところが2年になると、天と地の差です。授業には出て来ないし、教室の中で平気で寝ています。授業をさぼるのはいいのですが、さぼって自分が打ち込んでいる事に熱中しているのかというと、どうも違うではないようです。僕は授業に漫

然と出席しているのは嫌いです。自分がそうだったから。そんなのはつまらないし、時間の無駄です。僕は授業は教師が一方的に学生に何かを教えるものだとは考えていません。

「教える側」と「教えられる側」といった、一方向的な人間関係のあり方というのは、生理的に嫌いです。だから教壇という場は嫌いで、授業中は教室内を歩き回っています。自分がやっているメイエルホリドの演劇がそうなんだけれど、彼は演劇において「演じる者」と「観る者」という関係をぶっ壊そうとしました。「専門家」と「非専門家」の間に垣根を築いて、情報の独占をはかり、一方が他方を操作するのは耐えられません。授業でも同じじゃないかと思います。確かに授業では教師が学生に知識の伝授を行ないます。しかし何もしやちこばって教師の話を聞いている必要はありません。どんどん質問を出していいし、出すべきです。教師も学生を勉強させるが、学生も教師を勉強させなければならぬんです。本来学ぶというのはそういうものでしょう。だから単位さえ貰えればいいという姿勢は、一番嫌いです。



峰岸助教授

最後に、ここロシア語研究室で配布している「ポリフォニア」という小冊子を紹介します。この冊子は東工大のロシア語とフランス語の研究室の先生方が中心となって、同人誌のような形で発行している本です。ポリフォニアというのは「多声」という意味で、一元的でなく多元的に物を見たいという浦先生の考え方を通じるものがあります。背景となる文化の違う人間が一つところに集まって、いろんな事を言い合っている

うちに、そこから新しいものが出てくるのではないかという期待を込めて創刊されたそうです。内容はかなり高度ですが、研究室で希望者に配布しておられるということです。文科系の先生の研究に興味がある方は読んでみてはいかがでしょう。

(小野)